

# メガイアワビの放流技術開発

( 増殖技術開発事業 )

内田 浩・山根恭道

## 1. 研究目的

栽培対象種であるメガイアワビの種苗生産は平成7年度から本格的に開始され、県内各地先で種苗放流が実施されている。しかしながら、その放流効果は明確になっていないのが現状である。したがって、メガイアワビの放流効果を把握するための調査を実施すると共に効果的な放流方法の検討も行う。

## 2. 研究方法

### (1) 種苗放流追跡調査

島根町多古地区の通称上が原の水深2~7mにおいて、放流サイズ、時期を変えて放流したメガイアワビ(小型群:5万個・平均殻長21mm・平成12年8~9月放流、大型群:5万個・平均殻長42mm・平成13年2~5月放流)について、6月にスキューバ潜水による追跡調査を実施した。方法は放流海域において岸から沖に向かって100mの調査ラインを設定し、ラインに沿って4m幅でアワビを採捕し殻長、体重を測定した。

### (2) 放流個体の漁獲物混獲率調査

多伎町漁協において水揚げされたメガイアワビの殻長及び放流貝の混獲率を調査した。

### (3) 種苗放流試験

多伎町漁協地先において平成14年4月に40mmサイズを約4万個、平成15年2月に30mmサイズを約4万個放流した。今年度は放流のみであり、継続して多伎町漁協では調査実施する予定である。

## 3. 研究結果

### (1) 種苗放流追跡調査

調査海域の生息密度は小型群で0.004個/m<sup>2</sup>、大型群で0.013個/m<sup>2</sup>と放流当初(1.67個/m<sup>2</sup>)に比べて非常に低下していた。小型群においては放流1ヶ月後の調査において既に0.04個/m<sup>2</sup>に低下しており、その後の調査でも大きな変化は見られず生息密度は低い状況が続いていた。したがって、食害や調査場所の状況も考えられるが殻長21mmの放流では効果は期待できないと考えられる。大型群では放流2ヶ月後の調査においては0.3個/m<sup>2</sup>と低下しているものの小型群に比べて減少率は低い。その後も生息密度は減少しているが、放流海域における放流群の割合は、約3割あり他の年級群に比べて高いと考えられる。

### (2) 放流個体の漁獲物混獲率調査

多伎町漁協は平成9年以降継続してメガイアワビを放流している。また、漁業者による外敵駆除も行なわれている。メガイアワビ漁獲量は増加傾向にあり、平成14年は734kgで前年度の2.1倍、過去5ヶ年平均の2.7倍となった。アワビ類に占めるメガイアワビの割合も増加しており平成14年度は36%であった。放流メガイの混獲率は平成12年度46%、平成13年度83%、今年度は62%と高い傾向を示している。これまでの放流アワビが加入し混獲率は上昇していると考えられる。